



第81回 日本ダービー (GI)

The 81st Tokyo Yushun

[レースレビュー]

皐月賞馬との壮絶な叩き合いを制し、 12着デビュー馬が頂点に上り詰める!

今回の日本ダービー、山場は2度やってきた。スタート直後のホームストレッチにおける有力馬のポジション争い、そして最後の直線における叩き合いだ。そしてふたつの山場を巧く乗り越えたワンアンドオンリーが、粘る皐月賞馬イスラポニータに $\frac{3}{4}$ 馬身の差をつけ栄光のゴールに飛び込んだ。この大一番を改めて振り返ってみる。

阿部珠樹 = 文
text by Tamaki Abe

K.Ishiyama



“チーム・ノースヒルズ”は、昨年のキズナに続いて2連覇を達成

**皐月賞馬の距離不安と
牝馬の参戦がレースを難解にした**

混戦というのが今年のダービーに対する見方だった。だが、これはよく考えると不思議だった。
皐月賞馬イスラポニータは2歳重賞で一度不覚を取っただけで、5勝をあげ、皐月賞も1馬身4分の1差で完勝している。この戦績なら断然の1番人気に支持されても不思議ではない。にもかかわらず、戦前には混戦という見方が強かったのは、1にも2にも血統だろう。父のフジキセキはGI馬も出してはいるが2400mでどうかとなると疑問符が付く。そこにはかの馬もつけ込む余地があると思われたのだ。

もうひとつは牝馬ハープスターの存在だ。豪快な末脚で実力は牡馬牝馬を合わせてナンバワンとの呼び声が高く、実際にイスラポニータを破つてもいる。この馬と好勝負した牝馬レッドリヴェールがダービーに回ってきたことで、例年の検討要素に牝馬というファクターが加わり、一層難解に思われたのだ。

有力馬はそれぞれ推薦材料と同じほど不安も抱えていた。皐月賞2着のトウザワールドは優等生だが1番には物足りない。爆発的な末脚を持つワンアンドオンリーは善戦馬の域を出ない懸念もある。レッドリヴェールは初の長距離輸送と2戦目以降は増えたことのない体重に不安があった。

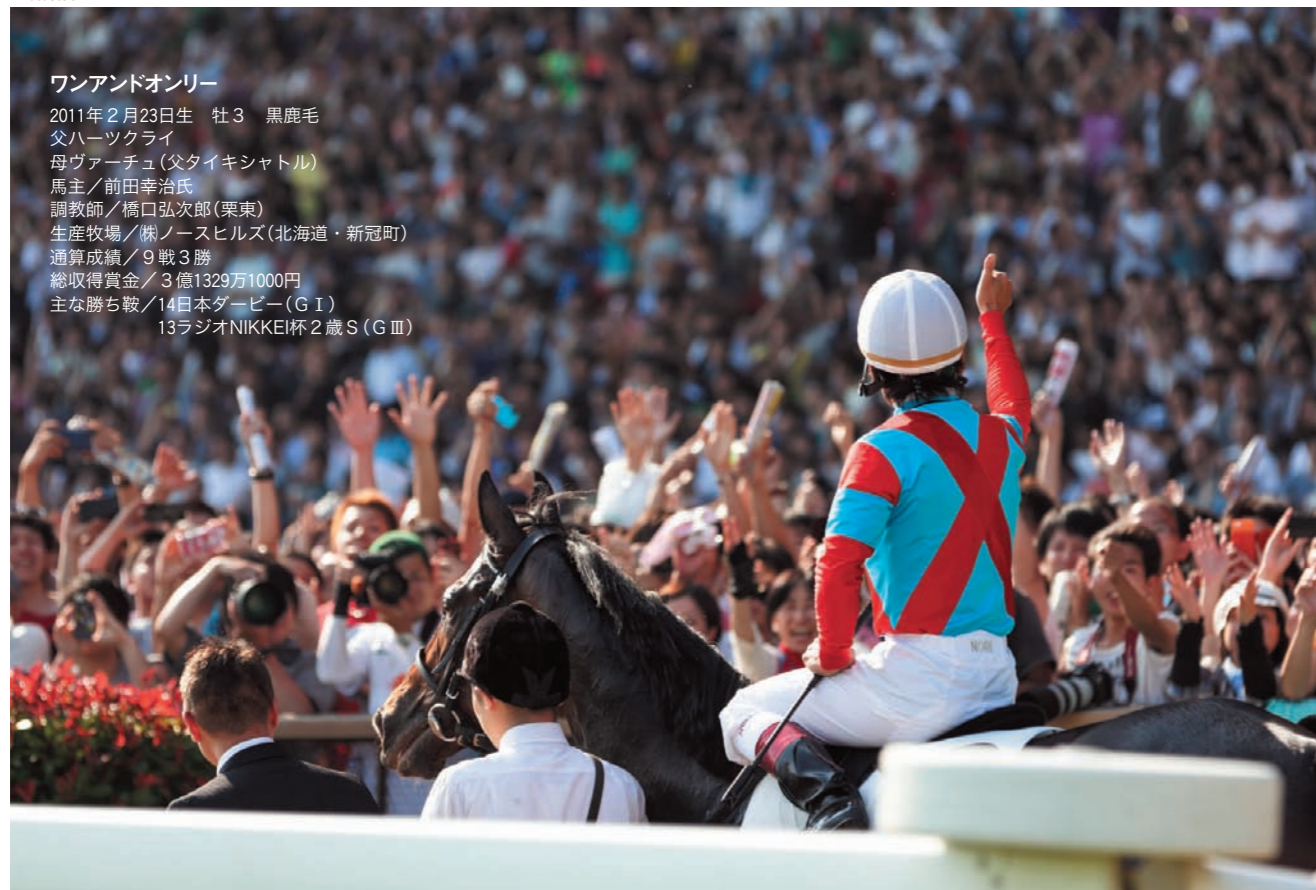
どこからでも買えそうだが、決断はむずかしい。そんなレースだった。

**ゲートが開いた後の
ポジション争いが鍵となった**

ゲートが開く前、レースを左右しそうな要素がふたつあった。ひとつは、この週の東京コースでは内ラチに近いところを通った先行馬がごとく好走し、外から追い込む馬が苦戦するという傾向。もうひとつは皐月賞で3着に逃げ粘ったウインフルブルムの出走取消である。そして、終わってみると、このふたつの要素を正確に理解し、対応したかどうかの結果にはつきり反映した。
ウインフルブルムの取消で、なにが逃げるかは不透明になった。だが、なにが逃げるにしてもウインフルブルムほどの速いペースで逃げることはないだろうと見られていた。ハイペースで引っ張り、なおかつ勝利に肉薄するほどの先行馬はいない。

ゲートが開くときまずエキマエが逃げて、ほかの馬を引き離しはじめた。これが今日の「司会者」か。ほかの騎手も観客もそう理解したはずだ。問題はそれにつづく位置取りである。1番人気のイスラポニータは13番枠から内に切れ込みながら、3番手をキープした。やや引っかかり、消耗したようにも見えたがまずは予想通りである。

意外だったのは2、3番人気の馬だ。5番枠からすんなり好位置につけるかと思われたトウザワールドは、川田将雅騎手が押しても行き脚がつかず、11番手で1コーナーを回った。これは意外だったが、さらに驚いたのは3番人気のワンア



ワンアンドオンリー

2011年2月23日生 牡3 黒鹿毛
父ハーツクライ
母ヴァーチュ(父タイキシャトル)
馬主/前田幸治氏
調教師/橋口弘次郎(栗東)
生産牧場/株ノースヒルズ(北海道・新冠町)
通算成績/9戦3勝
総取得賞金/3億1329万1000円
主な勝ち鞍/14日本ダービー(G1)
13ラジオNIKKEI杯2歳S(GIII)

14万人の大歓声を浴びながらスタンド前に戻ってきた横山典弘騎手とワンアンドオンリー



ワンアンドオンリーを管理する橋口弘次郎調教師(左)は悲願のダービー制覇。前田幸治オーナー(右)は昨年のキズナに続く関係馬の2連覇となった



小倉デビュー馬としてメイショウサムソン以来となるダービー馬に輝いたワンアンドオンリー

第81回 日本ダービー(GI)
The 81st Tokyo Yushun

着順	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム(差)	単勝(オッズ)	調教師
1	ワンアンドオンリー	牡3	57	横山典弘	2:24.6	5.6③	橋口弘次郎(栗東)
2	イスラボニータ	牡3	57	蛸名正義	¾	2.7①	栗田博憲(美浦)
3	マイネルフロスト	牡3	57	松岡正海	1½	108.0⑫	高木 登(美浦)
4	タガノグランバ	牡3	57	菱田裕二	クビ	230.3⑯	松田博資(栗東)
5	トゥザワールド	牡3	57	川田将雅	クビ	3.9②	池江泰寿(栗東)

6着以下ショウナンラグーン、アドマイヤデウス、ベルキャニオン、スズカデヴィアス、ワールドインパクト、サウンスオブアース、レッドリヴェール、ハギノハイブリッド、サトルパン、アズマシャトル、トーセンスターダム、エキマエ(中止)、ウインフルブルーム(取消)



これまで後方からの競馬が多かったトーセンスターダムが先頭に立とうかという勢い。ワンアンドオンリーも好位につけ、イスラボニータはかかり気味に先行した

ンドオンリーで、横山典弘騎手に導かれ、5番手の好位につけて進んだ。スタートでいったん後方に下げ、内めのコースを進みながら、直線では外に持ち出して追い込む。皐月賞のようなレースを想像していたファンはこの横山騎手の戦法に意表を突かれたのではないかと。 「絶対スローペースになる。ほかに行く馬がいなければ、ハナに立ってもいい」 レースの前にそう考えていたという。 自然に取りに行ったポジションではなく、意思で奪った位置だった。しかも2番枠だから、ラチ沿いのコースを通ることが出来る。このワンアンドオンリーのポジ

「想像を絶する皆さんの反応を見て、つくづくダービーとはこういうレースなのかと感じ入った」 レースが終わると橋口調教師はそんな感想を口にした。感激の気持ちが大きくて、言葉が追いつかないといった感じだった。この勝利をもたらした横山騎手は、ちょうど十年前、ワンアンドオンリーの父である橋口厩舎のハーツクライで2着と惜敗していた。「父」と「調教師」と「騎

手」、三者の十年越しの「復讐劇」が完結したわけだ。 終わってみれば勝った馬の走りは鮮やかで、コンディション調整も戦術の選択もパーフェクトだった。それでもやはり、運の要素も小さくないと感じてしまう。ウインフルブルームが出ていたら、ワンアンドオンリーが外の枠に入っていたら、イスラボニータがもう少し内の枠に入り、スムーズに先行できていれば、その

感激の気持ちが大きく、言葉が追いつかない調教師

シオン取りは、レース当日の芝コースでベストのものであった。極論すれば、2コーナーを回り、隊列がほぼ決まったところで、今年のダービーの勝敗はほぼ決したとさえいえる。 ワンアンドオンリーは負担の少ないインコースをイスラボニータをマークするように進む。そしてイスラボニータが残る300メートルあたりで先頭に立ったのを見計らい、外から並びかけて叩き合いにもちこんだ。父ハーツクライという距離への適性、ずっとイスラボニータをマークしていた追う者の強み、弥生賞でも皐月賞でも最速上がりタイムを叩き出している隣発力。並びかけたワンアンドオンリーには負ける要素がなかった。 橋口弘次郎調教師だからまたダービーでは2着だろう。それが宿命みたいなものだ。過去に4回も2着のあるシルバークレクターにはそんな見方もあった。だが銀メダル4個は無駄ではなく、ついに20回目の挑戦で金メダルが手に入った。

終わってみれば勝ち馬の走りは鮮やかで、コンディション調整も戦術も完璧だった。



イスラボニータとの叩き合いとなり、外からじわじわと先頭に躍り出るワンアンドオンリー